

HOLMES

THE
AUTOCRAT
OF THE
BREAKFAST-
TABLE

OKAKURA



Kenkyusha English Classics

THE AUTOCRAT OF THE BREAKFAST-TABLE

BY

OLIVER WENDELL HOLMES

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

Y. OKAKURA

PROFESSOR OF ENGLISH IN THE TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL

TOKYO

KENKYUSHA

1929



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



大正十二年三月十五日印刷
昭和四年六月十五日印刷

大正十二年三月二十日發行
昭和四年六月二十日訂正三版發行

主幹者 岡倉由三郎

主幹者 市河三喜

發行兼印刷者 小酒井五一郎
東京市麴町區富士見町六丁目七番地

印刷所 研究社印刷所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發行所 研究社

東京市麴町區富士見町六丁目五番地
電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番

— 非 賣 品 —

新榮社製本所

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

Y. OKAKURA AND S. ICHIKAWA

GENERAL EDITORS

First published 1921

Reprinted 1923, 1929

回 顧

若い人の考は將來に向つて走り、老人の思は過去を辿つて廻る。自分の筆がさかくありし昔の物語に陥りがちなことを、讀者よ、恕させたまへ。

自分が幼少であつた頃、誕生日と云つた様な祝ひの日に多くの客の招かれるをりをり、配膳の時刻間際になるさ臺所では母も嫂たちも、女中に打ち混つて膳部の調味に忙しく立ち働いてゐる。自分はその忙しさを餘所に、何の手つたひも出来ぬくせに、たゞあたりを迂路つきまはつて、椀に盛られる椎茸八つ頭、鍋に煮えかへる味噌汁と半べんなさを、小供心の餘念なく、たゞぼんやりと見いつてゐるのが常であつた。さうしたをりに自分の羨しくて堪へられなかつた事は、母や嫂たちが、おあんはい又はお毒見と稱へて、鍋のまゝの汁や、また付けたてぬ玉子焼のきれ端の類を小皿に時々掬ひあけ取りわけては、銘々鑑賞の舌鼓を鳴らして見せた事で、座敷に居列んで之を味ふことをやがて許されるさ知つてゐる身にも、之を一種の得がたい特權と云ふ光で自分は眺めてゐた。それだから、たまたま嫂の一人が、そのお毒見の小皿を、自分にも差し出して、お鹽梅して頂戴と誠しやかに言つてくれた折々に、自分は何とも言はず嬉しく感じた。小さな自分にも一人前の鑑識力があるかの如く扱はれる事が、味覺の満足にも増してよい心地であつたのである。そして、その時、今すこし鹽のきいた方がさか、甘さが不足さか云つた様な批評の辭や忠言めいた生意氣をさへ、鬨に乗つて稀には敢てした覺えが今に残つてゐる。今から想へば、さぞ眼上の者たちの笑ひ草であつたらう。この上一滴

の味噌、一さ掬みの鹽をさへ容さぬほど萬事出来あがつた食物を、頑是ない小供に味はせてその意見を徴する、そこに眼上の者の慈みがあり、そこに幼い者への親みが宿るのである。

英文學叢書の企が去年のまた若い月に研究社で肇められ、自分にも之に與るやうにその相談があつた時は、實を言ふと、自分にはその如何に困難な大きな事業であるかと云ふことが、臆けにほか認められなかつたのである。それがいよいよ事實となつて、刷物の形で自分の机の上へ送られ、讀者の心の餉として廣く世に配布せられるのであると云ふ重要さが、眞剣に感ぜられた時、自分は己が責任の容易ならざることを知悉した。それも道理、自分はいかうかと主幹の一人と自分を呼ぶことを敢てしてしまつたのであつたから。事茲に及んでは、最善を盡して責務を果すよりほかはないと覺悟の臍を固めて、自分自身擔當の第一巻を執筆し、先づよしとほつと一息吐く暇も殆どなく、後の分が續々印刷されて来る。これには自分も勢からず肝を冷したが幸に他の分擔の方々の原稿は、皆それぞれに精細の調査の具體化で、それに市河氏の驚くばかり綿密な批評の眼が加はつてゐるので、さうやら斯うやらお茶を濁して、遂に今日に及び、この一巻を以て第一回の二十四冊を無事に刊行し了る段取りになつた。その間、滿一歲以上に及んで、殆ど半日の、のびのびとした休養もさらずに、二つの夏一つの冬を、讀んで字通りに一日の如く執筆しとほして、幸に病にも罹らず無事で斯く過去の一年有餘を回想し得るのは、自分として寔に喜びに堪へない。要するに、自分は幼少の時分、臺所で嫂から經驗させて貰つたお毒見お鹽梅の大役に件ふ楽しさ嬉しさ、しかつめらしさ重々しさを、今茲に再び思ひがけもなく、同じ主幹の市河氏からも他の各執筆家からもまた味はして貰つてゐるわけなのだ。想へば自分は眞に果報の者である。それであるから今の自分からは、事のぶじに茲に至つたに對して深い感謝の

念が、その方々にも亦、物蔭から力添へをしてくれられてゐる研究社主や校正主任の木村幹氏にも絶えず流れてゐるのである。唯恐れるのは、主幹の一人としてのお毒見おあんはいの時の自分の説が三度に一度そのまゝ用ひられて、それが爲、原執筆者の手で折角旨く出来あがつてゐた汁や椀の物の味を、多少でもまづくしはしなかつたらうか、その一事である。

その一事のみが氣がかりなほか、その他の點から言へば、讀者が爲の美味珍膳を、先づ内證で一吸ひ一さ箸、青年の時分からの大好物を再び口にして喉を鳴らす場合、またはよい齡の今日までお耻しいが十分には翫味せずに居た殆どの初物に舌鼓を打つ場合、それぞれ一々に嬉しく勿體なく、これはまた何ぞ云ふ仕合せ者ぞと、思はず身の幸運が自らこそほがれずには措かれぬ仕儀、天を拜し地を拜して、この幸永かれと祈つたことも幾そたびであつたらう。

それ故、讀者の中には送本の都度かゝさず之を讀了した方は先づ妙なことゝ思はれるが、主幹の一人たる自分は、自身執筆の分は勿論他の分擔に屬する分も、註と原文と、一頁一頁、行を追つて校覈對照して行かぬものは無いので、あの細く刷つた一萬近い頁を過去一年餘に亘つて精細に讀み比べて來たかと思ふと、自分ながらよく精根が續いたものだと、不思議に堪へぬ。しかもその仕事はかなり多忙な公務の餘暇に行はれるよりしかたが無かつたため、春や夏の長休暇の外の時には、學校で毎日授業をした残りの時間が、専ら叢書の爲の執筆に宛てられて來たので、随つて夜も十二時より早く床に就く事は寧ろ稀と云つてよい。明けても暮れても出典の搜索、訓詁の物あさり、吐き散らす青息といきに、狭い書齋は、爲に天に知られぬ雲霧を起す次第、山と積んだ参考の辭書類で、机の上も下も雜然と紛糾した中に、小さな頭腦を左の手に支へ、右の手には一管のペン軸を握つたまゝ判斷に窮し思

慮に盡きてあるをりの自分の姿は、自分ながら痛ましい。自分が思はず頭を擡げて、欄間に掲げてある、いさしい、なつかしい母上の畫像——自分の三歳の時他界せられた自分の生みの母上の半身の畫像——を赤子のたよりなき眼を以てまたしても眺めるのは斯ういふ時である。わからぬ事たらけの穿鑿たてに倦みはて、幾分でも心機の一轉を計る必要上、無謀さは知りながら、多少でも創作氣分に浸らうとの腕きから、をりをり筆を翻譯に染めて見たのは、斯うした時であつた。乞はれるをよい事にして、「脱線帖」と題する漫文をこの眷物して見る氣の出たのも、斯うした心の悶への一つの發作に他ならない。さうさも知らず之を載せてくれた「英語青年」や「太陽」の讀者こそ飛んださはつちりを喰つたものだ。しかし、叢書の事業が第二回へさ續いていつて、自分がまたお毒見、おあんはいの大役を、皆様方のお慰みがてら承るさするさ、この後さても、翻譯たの漫文やらか、自分の心の保養の爲、眼先の轉換の爲、或は諸種の雜誌の讀者の迷惑の種さなる必要を生ぜぬさも限らぬ。そして欄間の母の畫像へも亦、さんよりさ疲れた眼が深夜の電燈の光をたよりに、屢々頼りなげに向けられることであらう。大分時代のついた爲に、色彩におちつきの出た、あれあの母上の畫像のお顔の上に。額の裡面には「歲在明治第九年甲子夏八月下澣寫描於東京三田慶應義塾 陳山麓吉」さある。母上は明治の三年に身まかられたのであるから、この畫は寫眞に基いての揮毫さ見える。描寫の跡から見て、當時世に知られた西洋式の肖像畫家の手に成つたものらしいが、それにしても陳山麓吉さは如何云ふ人物であつたのかしら。

大正十一年十月三十日

岡倉由三郎

INTRODUCTION

I. HOLMES 小 傳

Oliver Wendell Holmes は 1809 年の八月二十九日に生れた。生れた處は、Massachusetts の Cambridge で、Revolutionary War の起つた時には、General Ward の本營に使用され、又かの Bunker-Hill 防禦陣地の策戦はこの家の東南隅の部屋で運らされたのたと傳へられてゐる、アメリカ獨立の歴史には由緒の深い家の子である。この家は、今の Austin Hall の近くにあつた物で、彼の作中に屢々出て來る “gambrel-roofed house” は、即ち之、現に此 *Autocrat* にも、第四章 (p. 68, ll. 24) に “gambrel-roofed” cottage があり、又第十二章中の “Parson Turelli's Legacy,” (p. 278, l. 8) に “Born in a house with a gambrel-roof” とあるのがそれである。生れた土地 Cambridge にそのまゝ育ち、Washington Elm の下で日を暮して遊ぶうち、學校へ行く年頃になつて、先づ Mrs. Prentiss の開いてゐた所謂 “dame's school” へやられた。

その前に我々は彼の父母について少しばかり知つて置かなければならない。彼の父親は Rev. Abiel Holmes (1763-1837) といはれた Calvin 派の牧師で、*Annals of America* といふ書物も書き、下手ながら詩も詠んだ人であつた。祖父は醫者で、これも、Revolutionary War にも加つた人である。そのずつと祖先には、女詩人 Anne Bradstreet があつて、この人がまた Massachusetts の知事の娘で、更に後に、二度もその知事になつた Bradstreet 氏の妻であるなど聞けば、*Autocrat* の著者の貴族的な心情も無理のない生

れつきである事が肯かれる。それはかりではない、母親が又後妻ではあつたが、Sarah さ言ひ、New York の名家 Wendell 家の娘で、ずつとその祖先を辿つてゆくと、これにも、Vondell さいふ和蘭の詩人が發見されるのである。Vondell は勿論 Wendell の和蘭語に當る。我々の今親しんでゐる *Autocrat* の著者はこの Vondell 即 Wendell さいふ姓をその名に貰つたのである。

かゝる家柄の子 Oliver Wendell が生れた年には、Darwin, Lincoln, Tennyson, Gladstone, Chopin, Mendelssohn, Edgar Allan Poe など近代の偉人が續々さ星を同じくして生れ出たものであつたが、彼の父親は、この子の前途を更に顧慮する氣がなかつたかの如く、その almanac の八月二十九日の處へ asterisk を打つて、その頁の下のところへ、“son b.” と書き入れをしたに過ぎなかつたさいふ。蓋し“b.”は born の略である。

母親から、快活な、活潑な性分と、あたたかな茶氣頓智をうけついた Oliver Wendell Holmes は、幼い時分から詩が好きであつた。父親が二千冊の書を藏した library を持つてゐたので、この子は始終書に親しんでゐた。そして、その書の中から二人の詩人が彼の師として選ばれた。Pope と Goldsmith が即ちそれであつた。この二人の詩人は、彼が“dame's school”の生徒としてその真似をして作詩してゐた頃から、長じて、Dr. Holmes になつて死ぬまで、彼の師でありつづけたのである。

彼は、1824年 十五歳の時、Andover の Phillips Academy へ入學した。ここでは、やつと一年暮したばかりであつたが、只平凡な學生生活を送つただけらしい。

次の 1825年 十六歳の時、彼は Harvard 大學へ入つた。そして 1829年、二十歳の時それを卒業した。この生活もやはり、別に變つたこともなくて、只屢々 college paper へ詩文を投じて賞を得、名聲を博し、秀才の譽高く四年を経過したのであつた。然し

彼のゐた class は、“the class of '29” と呼ばれるもので、僑才を集めた點に於て、同大學に關係したものの記憶に深い。即ち、同窓には James Freeman Clarke が居り、又 *America* (1832) の著者 S. F. Smith もゐたのである。Emerson は彼よりも八年、Lowell は九年の先輩であつた。

大學を出てから一年、Holmes は、Dana Law School へ入學したが、法律に關して更に感興が起らなかつた。當時二十一歳である。ところが、この二十一歳の時に、彼を非常に有名にした一事件が起つた。それはかの“Old Ironsides”の名に記憶さるゝアメリカ海軍の frigate *Constitution* の破棄問題であつた。わが國ならば「三笠」さもいふべき、獨立戰爭に殊功を立てた軍艦を、當時の當局は、1830年の九月解體賣却しようとしたのである。この事を聞いた Holmes は、その九月の十五日、矢庭に“Old Ironsides”の一詩を賦して、大に當局の無情沒趣味を責めたのであつた。この詩はボストンの *Advertiser* 紙に載せられ、やがてたちまち米國中の新聞に轉載され、或はよみうり (broadside) となつて世間に流布さるるや、大に人心を動かして、軍艦破棄反對の聲を煽ること甚しく、遂に軍艦は、そのまま保存されるやう議が變るに至つたのである。かくてこの軍艦は米海軍の偉勳を永久に語る記念物となり、其後 Portsmouth に於ける練習艦として、Holmes の名と共に生きたのであつた。この“Old Ironsides”といふ詩は、我國の學生の間にも夙に知られてゐて、之を吟んだ者の數も尠くない。Holmes は一體かういふ occasional poems が巧みで、Harvard 大學にゐた折も、Commencement Day には、いつも巧妙な詩を物して、學生詩人の名を得てゐたのである。

法律は遂に彼の趣味の中になかつた。彼は醫學を以てその終身の業にしようとした。そして今度は Dr. James Jackson といふ人の主宰してゐた private school で勉強を始め、ここで二ヶ年を

過した。然し彼は單なる醫者に終るには餘りに多くの研學心と名譽心さを持てゐた。即ち、彼はやがて Paris 遊學を企てて、はるはる大西洋を渡り、フランスの學問を探りに行つたのであつた。時に 1833 年彼が二十四歳の春四月である。彼は New York を立つて二十四日の船旅を無事に Portsmouth へつき、Portsmouth から Havre へ渡り、そこから Paris へいつた。そして 1835 年の十月まで、足かけ三年、實に熱心に勉強した。我々は「實に熱心に勉強した」といふ語を、虚偽なしに彼について用ひ得る。“This one thing I do” といふのが彼の motto で、彼は books, lectures, clinics の外何一つ見も聞きも知りもしなかつたさ、ある biographer は傳へてゐる。

業を終へた秋、彼はイタリア、スキスを通つて、イギリスに數日滞在し、當時若い王女であらせられた後の Queen Victoria を見る機會を得、初めて、一時間凡そ二十五哩を走る steam railway train といふものに乗る經驗を得て、その十二月無事 New York に歸着した。そして、以來 Boston に住んで醫者を開業したのであつた。その motto に曰く、“The smallest fevers thankfully received” ぞ。“fevers” は favours の洒落。蓋し、「千客萬來」の意。

この醫術開業の二十七歳の年は、彼に取つて意義の深い年であつた。先づ彼は Doctor of Medicine の degree を得た。それから、最初の詩集を出した。この詩集の中にある “The Last Leaf” は、彼の最も characteristic な詩として、彼の評傳者 John Torrey Morse 氏も “Most delicate combination of pathos and humour in literature” と稱揚してゐる、代表的な佳作である。これから彼には、平穩な、そして名譽ある、醫學文學兩道の生活が始まるのである。

二年を越えて、1839 年、滿三十歳の時、彼は Dartmouth College の醫學部で Professor of Anatomy and Physiology に任ぜられた。それからその翌 1840 年六月十五日に、彼は Amelia Lee Jackson と

いふ女を娶つた。この女は、もろ State Supreme Judicial Court の Associate Justice たる Hon. Charles Jackson (1775-1855) の娘で才色兼備、のち内助の功多く、三人の子の母になつた人である。序でに、ここに、その子等の事を書かうなら、長子 Oliver Wendell は父の名をそのまま貰つたが、volunteer として陸軍に入り、Civil War の時には三度傷いて奮戦した。やがて (Dr. Holmes の詩 “My Hunt After the Captain” 参照) Lieutenant Captain に陞叙され、後には、母方の祖父も占めた同じ bench—Supreme Judicial Court の Associate Justice から Chief Justice になつた。第二子は娘で、これは、Mrs. Turner Sargent となり、第三子は Edward Jackson といふ名の男、これは、asthma を煩つて死んだ。その人の残した男の子供が Holmes 家の只一筋の血統である。

その頃彼は、非常に醫學研究に熱心で、數々の研究論文、みな世を益し、驚くほどの獨創と新發見を備へてゐたが、遂に 1842 年には *Homeopathy and its Kindred Delusions* といふ著述をして、いはゆる homeopathy (類似治療法) の妄をひらき、1843 年には、*Contagiousness of Puerperal Fever* を公にして、醫學社會に大渦巻を起した。一體彼の論文は、非常に觀察が鋭敏で、人道的な見解に富み、且つ後年 essayist として名を走せただけ、機智頓智の面白さがあつて、たぐひない papers たさせられたものであるといふ。

さういふ効績は、さうさう彼を母校の教壇に立たせた。即ち、1847 年、彼は Harvard 大學で Parkman Professor of Anatomy and Physiology に任せられ、爾後、この地位に三十五年間ゐたのであつた。彼の lecture は、fresh で witty で、lively で、而も學生を非常に drill するので、習ふものは面白い一方に、馬鹿に忙しく勉強しなければならなかつたさうである。

彼は今や大學教授である。それから詩人である。それから今一つは public lecturer であつた。一體アメリカでは、その頃大層公

開講義といふ事が流行してゐた。偉い人は皆、公に講演をして、公衆の教化に力め、各自の philosophy を披瀝したものであつた。Emerson と Holmes とは實にその中の双璧であつたのである。然しそれだけでは Holmes の名はまた Boston 以外に多く出でなかつた。のみならず Boston や Cambridge に於ける彼の地位は、また文壇以外の文人としてしか認められてゐなかつたのであつた。ところが、ここに彼を全米的に、やがて世界的に有名にした機會が來た。それは彼と *Atlantic Monthly* 誌との關係である。

彼は、既に四十八歳になつてゐた。多くの人ならば、ここから又改めて踏み慣れない人生は開拓しない年齢である。然るに Holmes には、不意にその機會が來た。そして勇敢にも彼は新しい出發をしたのであつた。即ち、今いふ *Atlantic Monthly* 誌が創刊されたのである。發行元は Phillips, Sampson & Co. でその社が當時文名いやちこの James Russel Lowell を擧つて來て editor にし、一つ雑誌を起したいといつた。するさ慧敏な Lowell は、もし Holmes が常任執筆してくれるならいふ條件つきで、Holmes をも連れ込んで、之を引き受けたのであつた。この不意に驚きはしたものの、Holmes は遂に起つた、そして自らそれに名づけて「大西洋月報」としたばかりでなく、Howell の語を藉りていへば、その雑誌を作りもしたのであつた。時 1857 年である。Holmes はおかげでここに半醉の状態から大に醒めたのたとも言はれる。さにかくその第一巻には各號缺かさずに漫文を物した。それが我々が今叢書に收めた *Autocrat* であつたのである。世の歡迎はすばらしいものであつた。その翌年は、有名な commercial panic で、多くの雑誌は、極度の打撃をうけたが、*Atlantic Monthly* 誌だけは Holmes のおかげで助かつたといふ。1858 年、この漫文は直ちに集められて、一冊として出版された。そして雑誌の上では、今度は “Professor at the Breakfast-Table” といふ標題で、同じやうな essays

が續けられた。これは、その名のもとに、1860 年に纏められた。次いで “The Poet at the Breakfast-Table” といふのが出て、これは 1872 年に一冊として出版された。次には “Over the Tea-cups” が連載されて、1890 年に本になつた。尙同誌には、これらの essays の他にも書いたものがあつたので、それを纏めて刊行したのが、1863 年の *Soundings from the Atlantic* である。いづれも、世間によく讀まれたには相違ないが、中でも *Autocrat* の評判が第一であつた。*Professor* も次で好評であつたが、これは一層思索的である爲に、前者ほど popular ではなかつた。殊に宗教上の新説が、舊弊なアメリカ宗教家達を驚した由である。

さういふ essays を以て、一躍大好評を博してゐた Holmes はその間に小説にも筆を執つた。即ち、1861 年の *Elsie Venner* (これは、もと *The Professor's Story* と名づけられたもの)、'67 年の *The Guardian Angel* 及び '85 年の *A Mortal Antipathy* がこれである。然し、所詮彼は小説家ではなくて、小説體の漫文を物したといふに過ぎなかつたから、この方面で大して名聲を成すには至らなかつた。

その他に彼は二つの評傳をも物した。それは、*John Lothrop Motley: A Memoir* (1878) と *Ralph Waldo Emerson* (1884) とである。これらも、決して彼の傑作といふ事は出来ない。が二つのうちでは、後者 Emerson 傳の方がよく出来てゐるといはれてゐる。これは American Men of Letters Series の中に收められてゐる。前者 Motley 傳は、Motley の死後數ヶ月にして書かれたもので、評傳といふよりも、Motley の爲に辯ずる書といつた方が適當である。

かかるうちに 1882 年、Holmes は七十三歳の老齡に達した。そこで彼は三十五年間勤続してゐた母校 Harvard 大學の教授を辭して、ここに悠々たる日月を楽しむ身になつたのである。これに先立つ三年 1880 年に同大學は、Doctor of Laws の學位を以て彼に報いてゐたのであつた。次で、1886 年 七十七歳の春、この老文學

者は再び歐洲訪問の途に上つた。一夏を英京ロンドンに費して、天晴大文人として至る處に歓迎され、大陸の諸國をも看廻つて、歸米したのであつたが、その旅の記は、あくる年 *Our Hundred Days in Europe* となつて出版された。この旅に彼は Cambridge 大學で Doctor of Letters にされ、Edinburgh 大學では Doctor of Laws の、Oxford 大學では Doctor of Civil Law の學位を授けられた。あくる年 1888 年には *Before the Curfew* といふ詩集が出た。その詩集の題から考へても、彼はもうこの世を去る時たさ感づいてゐたのであろうか。それでも、それから六年生きのびて、1894 年の十月七日の午後、彼は椅子に腰かけたまゝ、この世の命を終つた。時に八十四歳、大學の教授をやめてから丁度十年であつた。Boston は Mount Auburn の墓地に、このアメリカの貴族、紳士にして學者、科學者にして世間知りの茶人は、以來、靜かに眠つてゐるのである。

II. HOLMES の 文 藝

Holmes は實際、貴族であつた。紳士で學者で、そして世間知りであつた。そして poet で、essayist であつた。

今の世間でも Holmes は一方やはり詩人として通つてゐる。かの Trent and Erskine 等が著述 *A History of American Literature* に於ても、彼は “Writers of Familiar Verse” といふ chapter の中に收められてゐるのである。

彼の詩は、實に澤山ある。優に一卷の詩集をなして居るのであるが、彼はその一生、餘りに無造作で、餘りに濫作をし過ぎたと言つてよろしい。即ち彼はその點で、大に器量を下けてゐるのである。然し、そのうちでも、將來の anthology に残されるやうな詩が十や二十は抒情詩のうちに發見せられるといふのが、かの地の文藝史家の説くところである。